

常磐東小学校 校長だより

常磐緑

令和六年五月八日 第三号

→三年教室外のヒトツバタゴの花（通称「なんじゃもんじゃ」）

緊張の視線の先の風光る

ゴールデンウィーク、新緑に包まれた中央総合公園で市中学校総合体育大会の弓道の試合を観戦した。暑くも寒くもなく、ほぼ無風。弓道場の床は光るほどに磨かれており、芝生の先に十二の的が並んでいる。そこへ十二人の選手が整然と入場し、決まった所作を経て、各自のタイミングで四本の矢を射る。その間、選手・競技役員はもちろん、観戦者も無言。静寂の中、的を外すとその音はサクッと壁に吸収され、的を射たときは、「パンッ」と小気味良い音が辺りに響く。横並びした先頭に立つ選手は、背後十一人の動きが見えない。近くで弾ける音がすれば、同じチームの選手が的を射たことを知り、遠くで音がすれば、対戦チームの得点を知る。いや、音など聞こえぬほど集中していたかもしれない。試合中、先頭に立つ一人の選手に目が留まった。その選手は三矢を外し、最後の一矢を弓につがえはじめたが、指先や袖、袴が大きく震えている。弓を引く間も、袴の震えは止まることなくあった。ところが弓を放った次の瞬間、「パンッ」と弾ける音。的



【青木川へのアユの放流】

を射たのである。もう選手は震えていない。口を一文字に結び、冷静な顔つきで退場していった。

その後、選手が入れ替わったが、同様の光景を見た。三矢を外した四矢目、傍目に分かるほど震えていた選手が、的を射た。この震えは武者震いだろうか。「絶対に射貫く」という強い意志と、「チームのため、選手として選ばれた自分自身のため、無得点ではいられない」というプレッシャーからくるものだろうか。極度の緊張に打ち勝った選手に、心から拍手を送りたいと思った。

これまでの部活動や教育活動では、「高みを目指す」ことをスローガンに掲げることが多かった。近年では、スポーツに親しむこと、仲間との協力や社会性を学ぶこと、礼儀を身に付けること等、集団ごとに、または個人でも目的が多様化している。ウェルビーイング（身体だけでなく、精神面・社会面を含めた満たされた状態）を重視する流れもある。しかし、だからといって教育の場から競うことをはじめとしたストレスを、全てを排除するのではない。前出の弓道の選手のように、背水の陣で冷静に実力を発揮できる精神力や集中力を磨くのに、大会という舞台が生かされてもいる。緊張を乗り越える経験は、今後の運動以外の場面でも生きてくるだろう。

さて、五月は運動会。子供たちそれぞれの、「ここでがんばりたい」というこだわりの場面で本気と全力が発揮できるよう、心と体を鍛える機会としたい。今年度の目標として、「リレーで最後まで走り切る」と四月に決意した子もいる。それに向けてどんな努力できるか、求めて励む姿、頑張りをお待ちしている。



【運動会下学年演技の曲は、「できっこないをやらなくちゃ」】